

書写教育における筆順指導の研究

小池 勲

一、はじめに

本研究の目的は以下の三点である。

- 1、今までの筆順教育の経過を探り、現在一般に通用している常識的な筆順をまとめる。
- 2、筆順の実態を調査し、その結果を考察すること、筆順指導法に生かす。
- 3、学校教育で指導する筆順の定着をはかるための指導法を提示する。

二、「筆順指導の手びき」以前の筆順について

今日の日本の漢字筆順は昭和三十三年に文部省より示された「筆順指導の手びき」（以下「手びき」と呼ぶ）が実質的な基準になっている。昭和五十二年改訂の「教科書図書検定基準実施細則」において、筆順は一般に通用している常識的な筆順を示すよう記されているもの、実際の小中学校の教科書ではほとんどが「手びき」筆順に準拠している。では「手びき」以前の筆順についてはどうであったのか。長野県の資料を中心に筆順に連

いの見られる主な文字をまとめたものが表1（*1）である。「米庵墨談」は江戸末期の書家市河米庵の書論である。「小学国語習字帖教師用」は信濃教育会で出版された明治期の検定本の習字帖指導書である。「国民科初等科国語教師用指導書」は国定期の第五期国語教科書の指導書である。昭和二十年代の三つの資料は信濃教育会から出された児童生徒向けの漢字学習帳である。表からは二種類の筆順が併用されている実態や本によつてまちまちの筆順であることが読みとれる。注目すべきは「無」や「馬」の筆順である。この表を見る限りにおいて、「無」や「馬」は「手びき」以前は統一された一つの筆順が規範とされてきている。それが「手びき」以降、別の筆順に変えられたように受けとめられる。「手びき」にはこの変更について以下のような説明をしている。

『上から下への大原則により ㄣ ↓ ㄣ ↓ 無ではなく ㄣ ↓ 無 ↓ 無にし、馬 ↓ 馬ではなく ㄣ ↓ 馬 ↓ 馬にした。』このことから「手びき」筆順はそれまでの規範よりも原則を重視した選択をしたものと推察できる。

三、筆順の実態について

義務教育の現場にいと、児童生徒の筆順が教科書掲載の筆順（以下「基準筆順」と呼ぶ）でない書き方をしている場合がしばしばある。この筆順実態について基礎的な調査をした。一九八九年に勤務校であった長野県飯山市立第一中学校の一年生一四〇名を対象に一三七文字を一画ごとに積み重ねる書き方で筆順を調査した。文字を一画ごとに積み重ねる調査方法の利点は画の順序がわかると同時に、文字形成過程の途中での字形がわかったり、筆順と字形の関係を考察できることである。難点としては、何種類かの筆順の中から選択させたり画に順番を示す番号を振るのとは違い、データの量が多くなり処理に時間と労力が余計にかかることと、被験者の負担が多いことである。結果は一三七文字中約半数の文字が基準筆順率五〇パーセント以下であった。また、筆順の種類は対象文字の約二〇パーセントにあたる二十七文字で十通り以上の筆順を示した。中でも「蕭」は三十一通りの筆順を示した。更に、基準外の筆順の中に一種類だけ非常に出現率の高い文字や基準筆順と一種類の基準外筆順が約半々の割合で出現する文字など、文字によって出現する筆順に特徴があることがわかった。その後一九九五年に郵送依頼による再調査を行った。この依頼に対して四十三名から回答があった。回収率が低い理由として、一三七文字を一画ごとに積み重ねる書き方に負担を感じたことと就職や進学で故郷を離れてしまっていた

ことが考えられる。その分、回答のあった資料は信頼にたるものであると考えられる。結果は七年前の筆順と同じであるものが約八割であった。そしてほとんどの人が七割から九割の恒常率であった。また筆順の種類が多い文字ほど定着率の悪いこともわかった。再調査によって、筆順は中学一年生の段階で身につけたものはその後そう変わるものではなく、反復される度に独自の書き方が定着している様子がみえてきた。加えて、文字構造が複雑で幾通りも筆順のありそうな文字は一人の書き手の中でも一つの筆順に定着しにくい文字であることもわかった。

四、三十三の注意すべき筆順

義務教育段階での筆順指導については以下のように考えた。まず、教えるときは基準筆順の一種類を教える。次に実際の児童生徒の筆順が基準筆順でなくても、それが一般に通用している常識的なものであれば容認していく。また基準筆順でもなく一般に通用している常識的な筆順でもないときは訂正していく。

教科書掲載の基準筆順で書けるに越したことはない。ただ、実態調査の結果のように基準筆順率の悪い文字も少なくない。その原因を探ってみると以下のことが考えられる。まずは筆順の原則を知らない場合である。筆順

の原則については諸説あるが、次のように分類した。

- A 画の方向の原則 (①上から下へ ②左から右へ)
- B 画と画との順序の原則 (①上の画から下の画へ
②左の画から右の画へ ③横画から縦画へ ④左
払いから右払いへ)
- C 部分と部分との順序の原則 (①上の部分から下の
部分へ ②左の部分から右の部分へ ③外の部分
から内の部分へ)
- D 丁接筆における原則 (一↓下の連続)

筆順の原則を知らないというケースは比較的低学年の児童に見られる傾向であり、典型的な文字を取り上げてわからせることが大切である。

次は筆順の原則は知っているが、原則外の筆順を持つ文字を知らない場合である。例えば画と画との順序の原則外では右の画から左の画へ書く部分として「一↓一」がある。多くの生徒は「レ↓一」と書いてしまう。更に「隹」のように画が複雑でわかりにくい構造のものも基準筆順率は良くない。これらをもとに、原則性からはずれた誤りやすい文字構造を持つ33文字を最も注意すべき文字に据えた。それは以下の通りである。(かっこ内は共通する文字構造)

1、	上 (ト)	2、	田 (田)	3、	右 (ナ)
4、	馬 (厶)	5、	長 (冫)	6、	何 (可)
7、	万 (万)	8、	曜 (隹)	9、	感 (戊)
10、	級 (乃)	11、	区 (回)	12、	齒 (回)
13、	発 (𠂔)	14、	乘 (幸)	15、	寒 (井)
16、	臣 (冫)	17、	状 (爻)	18、	博 (土)
19、	無 (無)	20、	必 (必)	21、	飛
22、	過 (𠂔)	23、	快 (𠂔)	24、	犯 (𠂔)
25、	劇 (虍)	26、	濟 (月)	27、	座
28、	収	29、	卵	30、	巨 (冫)
31、	升 (升)	32、	肅	33、	棄

筆順の原則を身につけると同時にこれらの文字部分の筆順を覚え、同じ要素を持つ文字に応用させることで基準筆順が定着していくものと考えた。以下、基準筆順を定着させるために行った書写の授業を中心とした実践的研究を取り上げる。

五 実践的研究

1 研究の仮説の要旨

基準筆順とは違った筆順で書かれる原因として、筆順の原則性からの逸脱や文字構造の複雑さがあげられる。

そこで筆順の特設単元を設け、筆順の意義と関連させながら、筆順の原則性や最も注意すべき筆順を中心に学習させれば、基準筆順が定着し、字形も整ってくるであろうと考えた。

2 授業の実際

長野市立川中島中学校の平成8年度一年生、2クラスで比較授業を行った。A組は筆順とその意義を関連させて、筆順と字形を考えさせながら、注意すべき筆順について学習した。B組は筆順の意義を関連させず、筆順の知識のみを学習させた。その結果は以下の通りである。

① A組の場合

ア 人別基準筆順解答数

	0-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-33
事前	9名	9名	9名	5名	2名	0名
事後	0名	1名	4名	3名	7名	19名

イ 文字別基準筆順解答数

前	17	22	15	7	11	11	11	18	3	20	3	10	10	8	18	8	9	2	22	16	13	22	10	19	3
後	29	31	31	28	33	29	32	26	23	33	24	22	23	18	19	29	30	12	24	23	24	30	23	30	13

濟	座	収	卵	巨	升	廣	粟
12	4	2	8	13	5	5	0
30	26	30	19	28	18	15	18

② B組の場合

ア 人別基準筆順解答数

	0~5	6~10	11~15	16~20	21~25	26~33
事前	4名	14名	13名	4名	1名	0名
事後	0名	3名	17名	13名	3名	0名

イ 文字別基準筆順解答数

	上	田	右	馬	長	何	万	曜	感	級	区	苗	発	乗	寒	臣	状	博	無	必	飛	過	快	犯	劇
前	20	26	21	8	15	17	13	15	6	26	4	16	11	6	23	7	11	3	23	24	14	19	9	20	1
後	17	23	31	19	25	9	31	17	11	28	7	19	8	4	20	16	16	4	25	18	18	27	10	21	2

	濟	座	収	卵	巨	升	肅	乘
	11	3	1	7	8	10	3	4
	17	22	8	10	17	7	11	14

A組の場合は事前を1としたとき事後は2、3倍の正答数の伸びを示し、B組の場合は1、3倍の伸びであった。

これらの結果から、筆順と字形を関連させながら筆順指導をすることは、筆順のみを扱う指導に比べ、基準筆順の定着度を高めるのに効果的であることがわかった。また、筆順を正したことで字形が変化したことに驚きと感動を持つ生徒が多く、書写授業の意欲面でも有効な手

だてであることがわかった。

六 筆順と字形の関連性について

筆順は字形になんらかの影響を与えていると考えられる。その測定については手書き文字特有の個差(くせ、筆圧、書字経験の多少など)を厳密に取り去ることはで

きないため、正確さには欠けるが、おおよその傾向をつかむことはできる。ここでは筆順が字形に影響を与えていると考えられる文字部分の傾向を提示したい。傾向としてわかかってきたこととしては以下のとおりである。

○「右」

ノ ↓ ナ

・ 交点が左寄り、払いが曲線的になりやすい。

一 ↓ ナ

・ 交点が右寄り、払いが直線的になりやすい。

○「上」

一 ↓ ト

・ 縦画の中心付近に横画が接しやうい。

○「長」

一 ↓ ト

・ 縦画の上部に横画が接しやうい。

○「可」

可 ↓ 可

・ 横画が長くなりやすい。

○「ろ」

ノ ↓ ろ

・ 横画に口が近くなりやすい。

○「」

一 ↓ 一

・ 二本の短い左払いが同じ方向になりやすい。

上記のような特徴を示す原因は、合理性（次の画まで

の長さをできるだけ短くすること）や主幹線と派生線の関係（丁やトの形状の筆順）であると考えられる。

実証的研究において一人の書き手が二種類（基準筆順・基準外筆順）の筆順で書いた字形を比べた表2（*2）がある。字形の変化は明らかであるが、これらの場合、

字形の違いを筆順の違いにすべてを求めるのは短絡的である。一人の書き手である以上、二回目の方が書き慣れたともとれるし、基準筆順を知ったことで、丁寧に正しく書こうと意識したともとれる。しかし、指導者側からは筆順以外何のアドバイスもしておらず、それでいて自分の字形について見直すきっかけを与えているとすれば、筆順指導は字形指導のための一つの有効な手段となりうると考えられる。字形に変化の見られた文字をそれぞれの子生徒が気づく中で、部分的なこと以外に、字形の全体感やバランスの改善を指摘する声も多い。これは、今まで書き慣れてきた筆順の表現形過程が変わることに、新鮮さと良さを感じているからであろう。また、授業後の感想として、多くの生徒が自分の筆順を見直せたことに満足したり、字形が整ってきたことに喜びを感じている。客観的に見て改善前と改善後の字形にそれほど変化が見られなくても、主観的にはかなりの変化を感じ取っている生徒もあつた。これは書写学習への意欲で良い影響であると考えている。

七 今後の課題

今日の文字環境は印字機器の普及に伴い、変化してきている。その影響が手書き文字に対する意識や字形などにどのような変化になって表れてきているか興味深いところである。今回の研究でも、伝統的な文化の継承を重視する考えと文字の機能的な部分を重視する考えのあることがわかった。この二つの考え方は書写書道教育を大きく取り囲んでいる。両者が互いに反目せず、共存できる方向を考えていきたい。そのためには、自らが書を追求することと合わせて科学的な目を持って文字を見つめなければと考えている。

筆順は、まとまった数の調査をする一人一人それぞれ違いがあり、個性的であった。また、「肅」のように多種の筆順が出現することは予想をはるかに上回るもので驚きであった。教育的見地から基準筆順で書けることを目標に授業を組み立てたわけであるが、今後は、世代や職種などによって特徴がないものか、対象を広げて筆順の実態を調査してみたい。合わせて、筆順と字形を関連させた授業を更に追究したいと考えている。

(こいけ いさお 長野市立川中島中学校)

主な参考文献

『筆順指導の手びき』 文部省 1958

『筆順の解明』 江守賢治 日本習字普及協会

平成六年初版

『新訂 漢字指導の手引き』 久米 公 教育出版

平成元年初版

『楷書体漢字の筆順調査』 吉田公一 科学警察研究所

1987

*1 表1 筆順に違いがみられる上文字

米庵墨談 文化九年	こ字	正 摩摩座 俗 摩摩座	無(部)	馬(部)	又(部)	声(部)	感(部)	上(部)	非(部)	必(部)	非	耳(部)	、部
小学国語習字帖 教員川全 明治三十五年	△△字	なし	△△	一馬馬	く又	トモモ声	ゑ感	なし	月非	、ノ又又必 し又又必	く月月非	なし	なし
国民科初等科国語教師 用指導書 昭和十六年	△△△字	摩摩座	△△	一馬馬	く又	トト声	ゑ感	一ト上	月非	ノ又又必 、ノ又又必	く月月非	耳耳	、、
教育漢字練習帳 昭和二十四年	98字	なし	△△	一馬馬	く又	なし	ゑ感	一ト上	月非	、ノ又又必	なし	耳耳	、、
教育漢字の新しい学習 帳 昭和二十八年	881字	なし	△△	一馬馬	く又	なし	ゑ感	一ト上	月非	、ノ又又必	なし	耳耳	、、
当用漢字の新しい学習 帳 昭和二十九年	969字	摩摩座	△△	一馬馬	く又	一戸声	ゑ感	一ト上	月非	、ノ又又必	く月月非	耳耳	、、
筆順指導の手びき 昭和三十三年	881字	なし	△△無 (△△)	一馬馬 (一馬馬)	く又	なし	ゑ感 (ゑ感)	一ト上 (一ト)	月非	、ノ又又必 (ノ又又必) (心必) その他	なし	耳耳 (耳耳)	、、 (、、) (、、)
新しい当用漢字の書き 表し方 平成三年	1945字	摩摩座	△△無	一馬馬	く又	一戸声	ゑ感	一ト上	月非	、ノ又又必	く月月非	耳耳	、、

第2 表2

茶類の変化に伴い、字形が変化した例 (数字は A組 名称番号)

<p>齒(占齒) → 齒(榮齒) 1</p>	<p>感(-フ) → 感(1フ) 19</p>
<p>萬(フ万) → 万(5万) 7</p>	<p>何(丁可) → 何(可可) 40</p>
<p>右(-ナ) → 右(1ナ) 40</p>	<p>必(必必) → 必(ソ必必) 32</p>
<p>収(14) → 収(14) 4</p>	<p>長(-フ) → 長(1フ) 36</p>
<p>馬(-フ) → 馬(1フ) 15</p>	